

上州有田屋物語

萩原俊彦

(大学人文科学研究所嘱託研究員)

有田屋の老主人・元安中市長湯淺正次氏の訃報に接したのは、本年一月下旬のことであった。生前同氏は祖父湯淺治郎（一八五〇～一九三二年）に関する聞き取りに快く応じてくださっただけに、寂しさを感じた。

過去に、本格的な湯淺治郎研究は皆無であった。戦前では、唯一の追悼論集として湯淺三郎編『湯淺治郎』（一九三二年）、関連文献に姪の久布白落実著『湯淺初子』（東京市民教会出版部、一九三七年）がある。最近、半田喜作著『湯淺治郎と妻初』（あさを社、一九九四年）が出版され、昨年は太田愛人著『上州安中有田屋―湯淺治郎とその時代』（小沢書店）が出た。後者は多くの文献資料を集積し、有田屋の位置付けを安中との関係で叙述した書であり、近代史をダイナミックに把握するものとしても、近代日本プロテスタント史としても、好著といえる。同書

は、上州のキリスト教・自由民権と女権の波・民友社設立と言論活動・新島襄の死・波瀾の同志社・朝鮮伝道反対運動・石造の教会、という七章から構成されている。太田氏は、湯淺治郎の人生行路にこれら各章の内容を緻密に位置付けることを通じて、近代日本プロテスタント史を描いている。そこで、主としてこの書をひもときながら有田屋と湯淺治郎をめぐる物語をみてみたい。

父治郎吉、母もよの長男に生まれた湯淺治郎の生家有田屋は、上州安中（現安中市）の商家である。醸造業を中心に、養蚕・製糸・農業などを手広く営む。安中を通る中山道は幕末から、絹の道、殖産の道、文化の道であり、さらに明治になると、キリスト教を上州安中地方へ伝播する信仰の道となった。一八六九年に、ブラウン夫妻が安中を通り、在米中の新島襄の消息を



昭和初期の有田屋

伝えている。街道は海外情報を伝える役割をも担ったのである。有田屋の父子は商売のため、内外の情報を収集した。湯浅治郎は南京米や魚油の輸入販売、生糸輸出のため、横浜―安中間をしばしば往復して、情報を獲得。さらに、津田仙の稲作改良法を学ぶなど、斬新の知識を得て、経営を充実させた。著者はこの道の役割を重視する。また、一八七二年、有田屋は店の向側に便覧舎を設立した。和漢の古書、新刊の啓蒙書、特に治郎が愛読した福沢諭吉本など、蔵書三千冊が収められ、新聞・雑誌も無料で閲覧できるこの施設は図書館と言うべきで、同年設立の東京書籍館、京都集書院と並ぶ、近代日本最初の図書館である。現在、そこには「便覧舎址」の碑が立ち、安中市指定史跡となっている。一八七八年、この建物の二階で、新島襄が三十人の男女に施洗、自主・独立の自給教会である安中教会が発足。土地に定住の伝道者が不在ゆえ、湯浅治郎が奉仕した。以来、有田屋は基督者の情報収集と交換の場、来訪する基督者の定宿となる。新島襄夫妻、小崎弘道など多数が草履を脱いだ。まさに、有田屋は近代宗教文化発足の一基点となった。さらには廃娼運動など女性人権の擁護を課題とする民権運動が展開するのであった。

湯浅治郎は県会議員となるや、知事公選と廃娼をめざして戦った。後者はまさに、彼の信仰がストリートに人権思想と結ばれたものであり、早くも、一八八二年、廃娼の建議を可決、群馬県は一八九三年に日本最初の廃娼県になるのであった。彼が国会議員となるや、この運動は全国に拡大し、長期戦の結果、戦後の売春防止法の実現につながる。彼は警醒社や民友社で、

宗教的な出版文化の発展にも貢献したが、新島の死は、彼の人生を大きく変えることになった。

さて京都時代の湯浅治郎は、同志社の無給理事として約二十年間、財政の健全化のため働いた。その上、校地の整備に尽力、ようやく同志社は学園らしい概観を保つことができた。さらに、彼の努力もあり、明治末年には同志社大学が開学する。だが一方で同志社の世俗化を憂いて、「：然るに同志社の現状は何だ。世間一般の学校と少しも異なる所が無く、益々、世間と同じならんことを努めているではないか。：真に同志社の更生を祈らば新島先生の遺言に帰り、出直すべきである」（湯浅三郎編『湯浅治郎』二十六頁）と、退職後間もなく理事会を批判する一文を発表した。時を同じくして注目されるのは、湯浅治郎が挑んだ朝鮮伝道反対運動である。これには吉野作造・柏木義円がトリオを組み、一方では親族の徳富蘇峰が朝鮮総督府に協力、結



局、一九三二年、組合教会は朝鮮伝道を再検討することになる。晩年を迎えた湯浅治郎は、安中教会に新島記念会堂を献堂する。壮年期から靈南坂・番町・YMCA・同志社の校舎建築を手がけており、これが最後の建築事業となった。

湯浅治郎は数字に強い実直な商人道を弁えた政治家であり、和才洋魂の政治家、プロテスタンティズムを具現した政治家と要約できよう。日常の治郎は徹底した節儉主義の実践家であった。汽車は三等車、市電は極力片道のみ利用など。用なき旅はせず、芝居・映画・相撲見物などを否定した徹底した儉約ぶりであった。

その後の有田屋は、治郎の次男三郎に有償譲渡される。三郎は県会議員や基督者町長として声望を高めた。その息子、正次は高崎中学校在学中、安中教会・金蘭青年会で活躍、のちに新島中学校設立運動をおこした。その結晶こそ、新島学園である。

長じて、正次は群馬県教育委員長、安中市長、新島学園財務理事を歴任、叔父八郎を助け、同学園の教育に貢献した。正次はヤスクニ反対・政教分離を求める行動に参加した信仰者でもあった。祖父の血をひくというべきか。同志社と新島学園の教育、および両者の結び付きのかけに、有田屋、特に故湯浅正次の貢献があったのである。

かつて有田屋は慈善商法で住民の信用を高めたが、現代の有田屋は、合成添加物や防腐剤を使わず、原料の味を誠実にだす商品づくりで知られている。そこには有田屋の歴史が刻まれているようだ。